

天戸祐輝

表紙イラスト：トイト

試し読み版



いとこ姉の
セキ裸ラな秘密

二次元ぶち文庫

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『いとこ姉のセキ裸ラな秘密』
に基づいて作成しております。

※本作は二次元ドリーム文庫『生徒会長のセキ裸ラな秘密』（キルタイムコミュニケーション刊）とともにお読みいただけますと、よりお楽しみいただけます。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



いとこ姉の
セキ裸うな秘密

天戸祐輝
表紙／トイト

登場人物紹介

Characters

おとみねゆずは
音峰柚葉

容姿端麗・成績優秀な優等生。人気も高く告白する男子は後を絶たないが、そのいずれをも断っている。通学のために歩の家に居候しており、家では下着姿でいるなどズボラな一面もある。歩には、経験があるような仕種で迫るが、実は処女。

くらいとあゆむ
倉糸歩

中性的な自分の容姿にコンプレックスがある奥手な少年。いとこである柚葉に想いを寄せているが、なかなか告白することができない。

PCの起動音が鳴るなか、倉糸歩くらいとあゆむは。パジャマのまま机に向かっていた。

(新しいの、アップされてるかな……)

昂る気持ちを抑えられず、ワクワクしながらアダルトサイトをクリック。

高等学園の二年の彼は、友達に教えられたこのサイトにドップリとはまっていた。

理由はなんてことない。AVやエロ本も当然見るが、同年代の女の子が作ったといわれているこのサイトは、普通の女の子が肌を惜しげもなく晒しているのだ。

(裸、見せてくれないかな……)

部屋のドアを気にしながら目的のサイトを開き、PCの画面にひとりの女子が映る。だが、その彼女は服を着ていない。黒いセクシーな下着姿で、大胆に悩殺ポーズをとっている。画面の彼女が動く度に、小玉のスイカはありそうな肉果実が緩やかに揺れ、今にもブラジャーから乳芽が飛び出しそうだ。

腰はモデルのように細くくびれ、滑らかなお腹では縦長の綺麗なお臍がいいアクセントになっている。ショーツには淫部の形がわずかに浮き出し、彼女が後ろを向けば、適度な大きさの桃尻が布にその形を現すほどだ。

細い腕は見えている人を挑発するように動き、下着に包まれた胸や淫部に手を這わせては、視聴者サービスをするように肢体を撫でた。

(く、黒い下着っ!!)

思わずモニターに顔を寄せてしまうが、慌てて部屋のドアを気にして気持ち落落ち着かせる。こんなサイトを見ていることが家族に知られたら、言い訳もできない。なにより今の家には、絶対に嫌われたくない人物がいるのだ。

しかし、そんな気持ちを抱きながらも、目はPCのモニターから離れない。

初めて見る黒い下着姿がセクシーすぎて、心臓の鼓動が抑えられない。しかも、ショーツの盛り上がりやムチムチとした太腿がいやらしすぎて、瞬く間に股間が熱くなった。

(や、やっぱり見てみたいよ……)

部屋のドアを気にしながら、急いでキーボードを叩く。

彼女は下着姿を見せるだけで、それ以上は決して脱がない。そして素性を隠すためか絶対に画面に顔を映さず、音声すら消しているのだ。

【僕、歩っていいいます。あなたことが好きになつてしまいました。下着姿がセクシーすぎて夜も眠れないほどです。できれば、本当にできればですが、エッチな裸も見たいです】
(こんなの送ったって意味はないんだろうけど……)

見せてくれないとは思いつつ完成させた下手な文脈のメールを送り、画面を食い入るように見続けていると。

「あゝゆむっ。お風呂あいたよっ」

「うわああああああああっ！」

突然、ガチャッと部屋のドアが開けられ、白い下着姿の女の子が部屋に入ってきた。

「なにを慌ててんのよ。あっ!? もしかして、エッチなのでも見てた?」

「見て、見てないってっ! それより部屋を開けるときはノックぐらいしてよゆず柚ねえっ」

一つ年上のいとこ姉。音峰おとみねゆずは柚葉から、慌ててPCのモニターを隠す。が、興奮はおさまらない。モニターの女の子は見られないが、今度は目の前に下着姿の女子がいるのだ。

しかも、柚葉はすこし大人びた端正な面持ち。黒い瞳も大きくて鼻も高く、唇の形もいい美少女だ。ショートカットの黒髪も似合っていて、学園でも人気のある女子。

いとことはいえ、そんな美少女に下着姿を見せられたら思春期の少年に興奮を抑える術などない。

「どれどれ、お姉さんに見せてみなさいっ」

「や、やだよそんなっ。なんで柚ねえに……っ」

悪戯っ娘のように笑った彼女は、慌てる彼に抱きついてPCから離させる。

（う、うわっ。胸が……おっぱいが背中に当たっちゃってるよっ）

下着越しに感じる柔らかな肉果実が、背中であふれと潰れた感触に心臓が高鳴る。

シャンプーのいい香りと温かな体温に照れながら肩に乗せている柚ねえの横顔を見ると、彼女は再び悪戯っぼく笑う。

「こういうエッチな下着が好きなんだ。なら、今度着てみせてあげようか?」

さらに肉果実を背中に押しつけて、彼をからかった。

「も、もういいから出てってよ柚ねえっ」

「クスっ、はいはい。邪魔はしないわよっ」

照れながら怒った彼の姿に、柚葉はクスクスと笑いながら部屋から出て行く。

「こ、これ柚ねえに見られちゃった……」

罪悪感が込み上げる。

モニターの中にいる下着姿の女の子。彼がこの女の子が好きな理由は、柚葉にプロポーズションが似ているからだ。

それを知られたかもしれない。そう思った歩は恥ずかしくなり、明日どんな顔をすればいいのか分からなくなってしまうた。

※

柚ねえにエッチサイトを見られた翌日、歩はいつもと同じように登校していた。

「はあ〜っ」

つい溜息が洩れる。

そんな気分も無理はない。なにせ、彼の隣には……。

「どうしたの歩、そんなに憂鬱そうな顔して」

柚葉がニコニコとしながら歩いているのだ。

学園に通うようになって毎日の習慣といえる一緒の登校なのだが、さすがにあんな姿を見られた翌日では気まずい。

なにを話せばいいのか分からず黙って歩いているだけなのだが、無意識に歩く速度が遅くなる。

「そんなに昨日エッチサイト見ていたことが気になるの？」

「なっ!？」

心を見透かされたような言葉に驚き、息が止まりそうになった。

「もしかして、ネットの中の女の子が気になりすぎて『裸になって』とかメールしちゃったとか」

「な々なななっ!？　そ、そんなことし、してないって……」

慌てて弁解するが、動揺しすぎて自白しているようなものだ。

そんな姿がよほど面白いのだろう、彼女はクスクスと笑っている。

「ふふっ、歩かわいい。でも、このままじゃ遅れちゃうわよ」

歩く速度が遅いことに気づいた彼女が腕を掴み、歩を強引に引っ張る。

「いいから先に行つてよ、柚ねえ」

あまりの気まずさに、自分を置いていくように言ってみる。すこし距離をとりたい。それだけなのだが、柚葉はそんな言葉が気に入らなかつたらしい。

すこしムツとした顔の彼女は歩の背中に回り、両手で強引に押す。

「うわっ、うわわわわわわわわっ!! 転がるっ、こけちゃうよ柚ねえっ、押さないで……あぶっ、うわっ!」

「クスクスクスっ、わたしがいるのに遅刻なんて許さないからね。ほら、早く走るのっ」
「走るのって……のわあああああつ!」

幾多の学園生たちに注目されるなか、歩は悪戯っ娘のような柚葉に押されて学園まで走らされたのだった。

※

注目を浴びながら登校をした日の午後、歩は落ち込みながら下校していた。

「また告白されたなんて……」

学園で聞かされた新しい噂。柚葉がサッカー部の先輩に「つきあってくれ」と言われたことに、暗い気持ちを隠せない。

歩と柚葉は昔から仲がよく、兄弟のように育った。彼女が学園に通うため、校舎に近い彼の家に居候すると聞いた日には大喜びだった。

だが、いつの頃からか、彼は柚葉に対して特別な感情を持つてしまった。今では、噂でラブレターをもらったと聞けば苛立ち、男子と話している姿を見たら嫉妬するほどだ。いここでなければ、と何度も考えた。

(もっと、僕が男っぽかったら……)

毎朝、鏡で見る自分に苛立つ。

歩は自分の容姿にコンプレックスがある。それは、まったく男らしくないというものだ。身体も華奢で背も低く、顔は女の子と間違われるほど。その所為か積極性に乏しく気弱になってしまっている。

(取られたくないよ……)

心の中で呟く。

サッカー部の先輩は卒業したらプロ確定といわれ、人気のある男子。しかも、その告白を見た友達から聞いた話では柚葉もまんざらではない様子だったらしい。

「つきあっちゃうのかな、やつぱり……」

断わる理由などない。柚葉が他の男に取られる悔しさと悲しみに、歩はガツクリと肩を落としながら家の玄関を開けた。

『……ン………あ………つ………はあ………あ………』

「あれ？」

家の中に入った途端。苦しそうな、それでいて切ないような声が聞こえる。

「柚ねえ？」

玄関に揃えられている靴で、彼女が帰ってきているのは分かる。だが、なにか変な雰囲気

まるで襲われる女の子のような声で、ズボンのベルトを緩めた彼女を止める。

「な、なになって、だから……わたしも身体が疼いているから……」

説明になっていないことに気づいていないらしい。

柚葉は緊張した面持ちでパンツを下げ、飛び出したペニスに震える指を近づけた。

「だ、ダメだよ。汚い」

「だ、大丈夫。歩の身体で汚いところなんて、な、ないから……っ!？」

「うっ」

細い指先が肉幹に触れた途端、彼女はその熱さに驚いて瞳を見開き、歩は強烈なくすぐったさに腰を浮かせる。

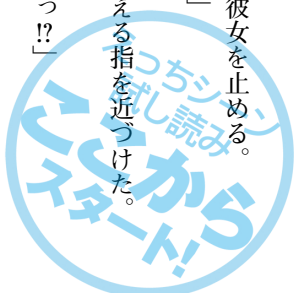
「こ、こんなに熱くさせてるなんて……。でも、こうすれば、すこしは熱いのも我慢できるかも」

「ゆ、柚ねえそれは、うあっ、ああっ！」

彼女に奪い返されたピンクショーツがペニスを包みこむ。すると、布越しに肉幹を握られた感触に、腰がガクガクと跳ね上がる。

初めて女の子に握られた肉幹にはサテン布のサラサラした感触と優しく握られたムズ痒さが走り、彼は背中を椅子に預けたまま動けなくなってしまう。

「き、気持ちいいの？ 歩」



コクコクと何度も頷いて答える。

手足を拘束されたわけでもないのに、ペニスを握られただけで身体が硬直している。もし少しでも動かせたらすぐに腰を振り、瞬く間に射精しそうだ。

「こ、こうすれば……いいのよね」

「うあつ、あつ、ゆ、柚ねえ……あうっ」

椅子の上で背中を仰け反らせ、女の子みたいに喘ぐ。

PCのモニターの中では長い髪の美少女がマングリ返しにされて喘ぎ、ペニスを根元まで啜える秘孔が丸見えになっている。

そんな刺激的な映像を見ながら、ショーツに包まれたペニスを扱かれているのだ。性経験のない歩は肉幹を引き攣らせ、サテン地が褻のようにペニスに絡まる焦燥的な痺れに、龟头を瞬く間に膨らませてしまう。

「うあつ、あつ……うっ、うう……っ」

呻くことしかできない。柔らかい手がゆつくりと肉幹を扱くだけで尿道が痺れ、濁液が切っ先へと駆け登っていく。

「だ、ダメだよ……これ以上されたら……僕、ぼく……」

「な、なあに？ これ以上されたら……、まだ二回しか手を動かしてな……」

「うああつ、あつ、やばっ……あつ、くうあああああつ！」

びゆるっ！　びゆるびゆるっ！　びゆるびゆるびゆるっ！

恥ずかしそうに彼女が三回目の扱きを始めた瞬間。刺激に耐えられずペニスが暴発した。いとこ姉の手の中で脈動した肉幹は、勢いよく精液を駆け登らせ、心地いい解放感とともにピンクショーツへと白濁液を飛び散らしている。

「うあっ、あっ、すご……あうっ！」

腰を何度かピクピクと跳ね上がらせて射精の痺れを繰り返した歩の目に、顔を真っ赤にさせて驚いている柚葉が映った。

「あ、歩……、わたし……」

弟のような存在を射精させ、どうすればいいのか迷っているらしい。

射精した肉幹に指を絡ませたまま唇を震わせ、身動きできなくなっている。布越しでも伝わる精液の熱さに手は震え、瞬きも忘れてショーツに包まれたペニスを見つめていた。

「あっ……こ、これが精液……歩が……」

ペニスを包んでいるショーツが、完全に白濁まみれになって色を変えている。しかも一番多く精液が染み込んだ部分が、よりにもよって淫部を包むクロッチだ。

柚ねえも自分の大事な部分を包んでいる部分が精液まみれになっていることに恥ずかしがり、黒い瞳を震わせている。

「ご、ごめん柚ねえっ。僕、気持ちよすぎて……」

恥ずかしさを感じながらも、ショーツを汚してしまったことをあやまる。

「袖ねえ？」

聞こえなかつたらしく、再び彼女に話しかけると。

「……えっ、い、いいのよ別に……。わたしの手で気持ちよくなつた歩、すごく可愛らしかったし……ね」

やっと冷静になつた彼女が、はつとした表情で答え返した。だが、その瞳は気にしてない、と言いながらもペニスを見つめている。

射精したあとなのに歩のペニスは萎えることはなく、硬く勃起したままショーツに包まれているのだ。

「クスっ、まだこんなに元気なんだ」

「み、見ないでよ。恥ずかしくて……」

泣きそうになりながら、ショーツに包まれたままの股間を隠す。だが、彼女はずっと彼を見たまま動かない。

黒い瞳を潤ませ、モジモジと太腿を擦り合わせている。

「歩だけを恥ずかしくさせたらダメだね。だから、わたしも……」

緊張をほぐすようにニコつと笑つた彼女は立ち上がり、そのまま水色のチュニックを脱ぎ始めた。

呼吸をするのも忘れそうになる。

彼女が自らショーツに指をかけ、引き下ろし始めたのだ。

白い下着が彼女の淫部から離れて太腿を下がるだけで少年の鼓動は早まり、ペニスがかピクンと脈を打った。

「あ、み、見られてる……大事なところが……わたしのアソコが歩に……」

トロツと淫部から濃い愛液をショーツに垂らした彼女が艶めかしい仕種で片脚ずつ足を引き抜き、スカートを捲くたまま彼の目の前に立つ。

目の前に女の子のアソコ。今にも触れそうなその状態に、彼は瞬きも忘れる。

「わたしのベッドに寝て……」

「え、あ、う、うん……」

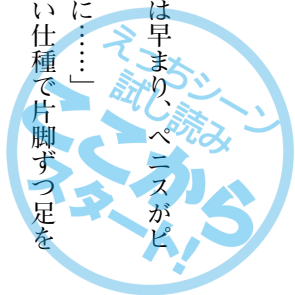
情けなく答えながらも、歩は彼女に押し倒されるように仰向けになった。

スカートのみの姿になった彼女は横目で斜め前方にあるカメラを確認すると、そのまま彼の腰に跨る。

「は、恥ずかしい、下から覗かれてるなんて……」

今からエッチをする。その緊張と処女を失う怖さが脳裏をよぎったらしい。

柚葉は跨ったまま緊張した面持ちで呼吸を何度も繰り返し、真下で勃起しているペニスを見つめた。



「エッチする……のよね。今から……はあはあ……、い、いくよ……」

緊張を解すように深い呼吸を繰り返した彼女がニコツと微笑みながら腰をゆつくりと下ろし、秘孔をペニスに近づける。

「ふぁんんっ」

「うあっ」

細い腰が下がり、秘孔と亀頭が触れた瞬間、性器が触れ合ったくすぐったさに二人は上ずった声を奏でた。

「わ、わたしのアソコに歩のが……」

今にも挿入してしまいそうな状態。しかし、彼女はその状態から動こうとはしない。何度も深い呼吸を繰り返し、ペニスを見つめている。

「ゆ、柚ねえ……?」

「だ、大丈夫……っ」

戸惑っているような彼女を心配すると、柚葉は覚悟を決めたように嬉しそうに微笑み、グプツと膣口を広げてペニスを受け入れ始めた。

「わ、わたしの初めて、歩にあげるから……んっ、んあ……はくっ……っ……んううううううううううう——っッ!」

じゅりゅ……じゅにゅ……プツッ! ジュプジュプジュプジュプウウウウウツッ!

「うああっ!! 柚ねえ……あつ、ダメだよこんな……こんな耐えられないっ、僕……ぼくううううっ!」

柚ねえが細腰を下ろし、秘孔を淫らに広げながら一気にペニスの根元まで膣内に受け入れた直後、彼は初めて感じる膣内の温かさとペニスが潰れてしまいそうな締めつけ、そして、ザラザラとした膣壁の刺激に早くも射精してしまいそうになる。

「あふッ、あう……お腹の中が……んう……歩に処女あげて、すぐく痛いのに……すぐく気持ちいいよ……」

騎乗位で桃尻を彼の脚に押し当てた柚葉が、うっとりとした声で呟く。

だが、歩に彼女の艶めかしい表情を見る余裕も、その濡れた声を聞く余裕もない。ペニスを包み込んだ熱く感じる膣壁と、無数の膣粒が付着した壁が肉幹に絡みつくムズ痒い刺激に、今にも理性が吹っ飛んでしまいそうだ。

狭い膣内は処女を失ったばかりにもかかわらず奥へと向かってうねり、まるで口淫されているように尿道の中まで痺れさせる。

「こ、これがエッチ……はふッ、すぐく幸せだよお……」

騎乗位でペニスを根元まで受け入れた彼女が、再びうっとり呟いた。

初めてのエッチに二人は動くことさえできず、何度も荒い呼吸を繰り返しながら視線を絡ませる。

「うあつ、ゆ、柚ねえ……僕、ぼくううつ」

「だ、大丈夫……大丈夫だからわたしに任せなさい……あふつ、歩のがわたしの中で……んっ、ああ……」

ペニスを包む膣の刺激に耐えられず歩が眩くと、騎乗位の彼女が濡れた声で答えた。

痛みは感じてはいるはずなのに、柚葉の声からはまったくそれを感じない。

初めてで、しかも撮影しながらのエッチに興奮が高まり、痛みを薄れさせているようだ。過剰な刺激に射精しそうな歩の姿を見ながら、肢体をプルプルと震わせて吐息を繰り返している。

「すごい、すごいよ柚ねえ……っ、僕の痺れて……ふあつ、また出ちゃうよっ」

腰をピクンと跳ねさせて女の子のように声を上ずらせた彼の姿に、彼女は黒い瞳を潤ませて歩の両手を肉果実に導く。

「ふうあんッ。胸……わたしのおっぱい揉んで歩つ。お腹の中もいっぱいで……が、我慢できない、動くからね、わたし動くからああああッ！」

「だ、ダメだよっ、そんなことされたら、今動かれたらまたっ」
ジュプッ、ジュプッ、ジュプッ、ジュプッ。

胸に掌が埋まった乳悦に耐えられなくなったように、柚葉の肢体が上下に弾んだ。

初エッチにのめりこんだ彼女の秘孔からは淫らな挿入音が鳴り響き、溢れ出た愛液が肉

幹を伝わって彼の腹部まで濡らしている。

「ゆ、袖ねえ……僕、ぼくつつつ」

拍車がかかったような袖葉の動きに、もうまともに話せない。

彼女の肢体が騎乗位で上下に動く度に肉幹を無数の膺襞が擦り、狭い膺内がピツタリとペニスに張りついて扱きたてる。

初めて挿入したペニスには、彼女の身体がすこし動くだけで肉幹の内部に強烈な痺れが走り、二度も射精したのに再び精液が駆け登っていく。

「あふッ、あッ……ふあんッ！ ま、また歩のがピクピクして……はあはあ、わたしの中で震えて……はふッ、あッ、はううッ！」

ペニスの脈動に気づいた彼女が、さらに細腰をくねらせ始めた。ミニスカートのみの肢体は汗にまみれてヌメ光り、彼に揉まれている肉果実が大きく弾んでカメラに映っている。ニュチャ、ジュプツと淫水音を鳴らす秘孔は何度も捲れ返って充血した秘粘膜を覗かせ、歩の興奮を際限なく昂らせた。

「うあつ、うつ、ゆ、袖ねえ……全部、全部見えちゃってるよつ。袖ねえのおっぱいもアソコも……うつ、僕のが入っていると全部、全部見えて……はあはあ」

「ふうああああッ！ あふッ、あッ、あくうんんッ！ 見られて……わたしの全部……全部が歩に……あひッ、いいの……もつと見てッ、もつとわたしを見てッ！」

カメラの方向をチラッと見た途端、見られると興奮する性癖が暴走したように肢体の上
下運動が激しくなる。

挿入音はジュプツ、ジュチャツ！ と吸いつくような音になって部屋中に響き、膣内が
大きく波打ってペニスを最奥へと引き込んでいく。膣口と膣壁は、強烈な締めつけとなっ
て肉幹を扱き、胎内を降りた子宮口がキスをするように龟头に吸いついた。

「うあああつ、あつ、すごいよ……柚ねえつ、すごすぎてっ」
びゅるっ、びゅるびゅるびゅるっ！

「ふうあんツツ!? で、出てるツ……でもいいの、もつと出して……もつとわたしの中に
出して歩ツ、んツ、んチュ……ふうああ……」

あまりに焦燥的な痺れに、我慢をする間もなく白濁液が飛び散る。だが、それでこのエ
ッチが終わるわけではない。膣内射精で感じた彼女はさらに興奮を高めて肢体を震わせ、
うっとりとした表情で彼と唇を重ねた。

舌を絡ませる濃厚なキスと身体に感じる体温。そして、桃尻を上下に振りまくってペニ
スを刺激する柚葉の姿に歩のペニスは萎えることもできずに硬く反り返り、彼女の秘孔を
貫き続ける。

「ゆ、柚ねえ……すごいよ。柚ねえがこんなにあツチだったなんて……、僕もう抑えられ
ないっ。だから、だから柚ねえを僕だけのものにしたたいよっ！」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>